

# 体育と道徳

## —アンリ・ベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』よりの探求—

中島 理志 (大阪教育大学)

### 【研究の背景と目的及び方法】

体育(科)に内在する道徳についての諸問題は、常に一般社会からその解決へ向けた方策の提示と期待が求められている。ところで近年の教育現場では、小中学校で道徳の教科化が定められ、高等学校で新科目「公共」が創設された。しかし、体育で講ずべき道徳の問題については多くの教育者から検討課題として指摘されているにも関わらず、これまで問題として深く取り組まれてこなかったと言える。そこで、本研究の方法として、20世紀フランスの哲学者アンリ・ベルクソン(Henri Bergson: 1859-1941)の提唱する2種類の道徳を参照軸とし、高等学校における道徳教育の実態の検討を通じて高等学校保健体育科にて教育すべき道徳内容の再解明を試みた。

### 【結果と考察：第一章～第三章】

第一章では、わが国における道徳教育の内容が現状に至った経緯について近代以降の教育史から振り返ることで検討を加えて明らかにした。その結果、大別して次の、二つの要因が現行の道徳教育の基礎をなすことが明らかとなった。

第一に、戦前まで行われた「修身」科教育の復活に対する危惧である。つまり、「修身」科によって、いわば教条的に定められた価値観を国家から児童生徒へ、無批判的に教え込ませることで、戦争肯定へと偏向した反省である。当該の経緯から、日本は教条主義的な道徳教育を極端に忌避する傾向となった。

第二に、近未来において多文化共生的な価値観を持つ社会へと変貌することへの予測である。よって当該の社会実現へ向けた資質・能力の育成を主眼とした道徳教育が推進されていく。

この二要因の結果、日本の道徳教育、殊に高等学校においては、新科目「公共」の学習内容に多文化共生へと向けた内容が色濃く反映され、この「公共」を中心とした道徳教育の展開が学習指導要領にて明らかに確認できた。

第二章では、体育(科)の教育内容と密接な係わりをもつ高等学校の道徳教育についてさらに検討した。

木下によれば、体育は4つの概念で構成されており、現代の体育科が目標とする「身体の教育」「身体を通しての教育」へと思想の観点から相通ずるものを確認できる。しかし、現代の保健体育科教員は主

に生徒指導を職務内容とする事例の多いことも背景とし、生徒に対する規律等に教育の主眼が偏向していると言える。この発想は、第一に体育の教育内容としての道徳本来のあり方とは異なったものであり、第二に現代の道徳教育全般の教育内容と共通している。他方、これらの道徳教育を教育学者の村井らは批判し、児童生徒による自由で批判的な思考を以て道徳教育を再考すべきであるとした。この思考は、新学習指導要領で示された道徳教育の目標と、フランスのリセ(高等学校)における哲学教育の目標と合致していることから、以下に述べるベルクソンの議論を援用することの妥当性が明らかとなった。

第三章では、ベルクソンの唱えた「閉じた道徳」と、「開かれた道徳」の視点から議論を進捗させた。まず「閉じた道徳」とは、社会が効率よく機能するために、我々に与えた圧力の形を採る道徳のありかたである。圧力とは、一方で、エゴイズムを自らに採用する人物が一般社会へ与える不安を原理的に排除する仕組みであり、他方では、全く無気力な人物が社会の機能を停止せぬよう仕向ける仕組みである。

「開かれた道徳」は、自我の深層にある絶対的な道徳、すなわち良心を基調とした道徳である。この道徳が重要視することは、個人の人格の不可侵性と通約不可能性、つまり個人の尊厳である。その為、多数の幸福のために、個人を犠牲にすることを否定するのだ。

### 【結論】

現在、高等学校で行われている道徳教育の担い手は、主に保健体育科教員である。彼らの意識の中心には、ベルクソンが提唱した「閉じた道徳」へと向かう傾向が確認された。しかし、新学習指導要領において一部類似点が確認できる通り、保健体育科においても従来とは異なる道徳教育への視点が求められている。その実現に向けてベルクソンの提唱する「開かれた道徳」は大きな示唆を与える。すなわち、児童生徒の深層に眠る「神的達観」の目覚めを促し、果てに人類愛を目標とする道徳の実現である。

### 【主要参考文献】

1) アンリ・ベルクソン 「道徳と宗教の二つの源泉」 合田正人訳・小野浩太郎訳、筑摩書房、2015

